
別れた日。

藤木 了

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別れた日。

【Nコード】

N7472E

【作者名】

藤木 了

【あらすじ】

彼女が、別れると言い出した

「もう別れる!!」

俺は。

頭の中でグワングワンと鐘の音を聞きながら、ぼんやりと。

「ああ、わかった」

頷いた――。

付き合い始めて、かなり経つ。

当初の浮き立つ気持ちもなくなって一緒にいるだけで和む存在となっていた。

いまいち釈然としない理由で怒られるのも、いつものことだったが。

まさか、別れると言われるとは思わなかった。

大事な彼女。

照れが先立って大事にしきれなくて、その内ふられるのかも、とも。思っていた。

それでも思っていた以上に、俺はダメージ受けていた。

すがりたい、

別れたくない、

俺を好きだと言って欲しい。
んな、女々しいことが言えるワケがなく。

彼女の意思を大事にしてえな、とか思えば。

「あたし、好きな人いるの」
爆弾発言、落されちまうし。

頭の中に、思いつきり釘を打ち下ろされた気分だ。

「そうか、俺に出来ることあれば言えよ。応援してるからさ」
さすがに笑うまでは出来ず、淡々と、声が震えないよう気をつけながら言葉を紡ぐ。
「ばかあああ!!」

ばあああん!!

走り去る彼女。痛む頬をさする俺。
しばらく呆然としていたが、ここは大学のカフェ。
周りを見渡して、注目を浴びている事実に気がついた。

恥いな。

アイツと俺が使ったカップを持って、ゆっくり立ち上がる。
「ちよつと、今の何よ」

うるんげに声がする方向を見やる。
ああ、アイツとよく一緒にいる 名前は忘れた。

「あの子のどこが不満なのっ!？」
おい？

「振られたのは俺だぜ」

今の話聞いてたんじゃないのか？

たださえ、俺は機嫌が悪いつてんのに、ぎゃーぎゃーと。マジうつせー。

「アンタがそっけないからでしょー！！ 今の会話なにっ！？ 『別れる』って言われて頷くのっ！？ 『好きな人がある』って言うたら『応援する』？ アンタ、付き合ってるんじゃないの、そこは『別れたくない』とか言う場面でしょー！！」

今にも殴りかかってきそうな勢いに。

俺は、盛大にため息をついた。

「あのなあ。別れたいつて言ったのは向こうだろ。俺がなんやかんや言っただってしゃーねえじゃねえか」

俺達が別れるのを阻止すんなら、アイツに言えよ、アイツに。

「好きじゃないから、そう簡単に別れるって言えるのよ！！ あの子は、ただアンタの気持ちを確かめたいから、あんな大嘘ついただけなのに！！」

「嘘？」

そういえば。以前にも似たようなコトがあったような。

『ねえねえ、あの人カツコイイ！！』

『ふうん』

『ね、ね、嫉妬した？』

『は？』

『嘘だつて、嘘♪』

「もういいっ！ こんな冷血漢別れて正解よ！ 私がもつといい男を紹介してあげるんだから！！」

おいおい、アイツの言葉が嘘だのなんだの言った矢先に別れて正解セリフかよ。

まあ、こっちの方はどうでもいい。騒ぐだけ騒げ。けどな。

「んなコトしやがったら、許さねえよ」

アイツが俺に愛想を尽かして別れるのはいい。しかし、他人に間に入られて別れる羽目になるのは、ムカツク。

ガタン

大きく椅子を引いて、食器返却口へ向かう。

「え？ ちょ、ちよつと！？」

俺の怒りが伝わったらしく妙に戸惑った声は聞こえたが、追いかけてはこなかった――。

嫉妬とか。追いつがるとか。引きとめるとか。

カッコ悪いし、アイツの意思を無理矢理こっちに向けるようで、

俺は見せるのは嫌だ。

アイツに嫉妬されるなら嬉しいけどな。好きでもない奴らに、嫉妬だのなんだのされるのはゴメンだ。うざってえ。

そう思うから、余計に自分のそんな姿は見せたくねえのに。

アイツも俺と同じように思っていてくれたんだろうか。

思っていた所で分かんねえよな。俺もあいつも。

アイツは、俺の『好きだ』が分からなくて、ああ言っただけらしい。

。

時間が立つことに不安になるぞ。別れるっつーたのは向こうじゃねえか。

けど、俺がアイツのコトが、どれだけ好きか知らねえからって話なら。

それをどうやって言うかが。言ったからって信用できるとも、俺がうまく伝えられるとも思わねえし。

俺は多分何も、アイツが同じ事を言ってきたら、また頷いちまう。

だってなあ。大事なんだぜ。マジで。

アイツに自分の意見を押しつけるような真似が出来るかよ。

ピンポーン

ゆつくりと、インターホンを押した。
くそー、こんなのは俺のガラじゃねえんだ。

カチャ

「はい」

警戒心の欠片もなく、開けられるドア。

「あ」

呆然と見上げてくる瞳。

「お前な、誰が来たか確認してから開けるよな」

歓迎されてなさ気だよな、これ。

「だ、大丈夫っ、ちゃんと覗き穴から確認したしっっ！！」
うそつけ。

って、いつもなら叩ける軽口が出ない。

「あの、あのあのあのっっ！！」
向こうも向こうで、言葉が出てこないらしい。

やべ。追い返される前に言わねえと。

「これやる」

「え？」

手の上に乗せたのは、銀の飾り気も何もないシンプルな指輪。しかし、太いから結構目立つ。

「エンゲージリング」

「ええええっ！？　なんでっ！？」

とりあえず話は聞いて貰えそうで、ほっとした。

「いらなきや、くれ」

手を差し出すと、ぎゅっと指輪を握り締められる。

なるほど。

さっきのセリフは嘘で間違いねえんだ。

本当に別れたいなら、返してくるだろうしな。

「じゃなくて！　だって、このまま貰っちゃったら、そのまま、ええっ！？」

　　しゃあねえだろ。俺がどれだけコイツが好きか、解りやすい形つつーたら、これしか思いつかねえんだし。

　　ため息をつく。

　　疲れた。気が抜けた。

「そう、結婚。お前、別れるだの何だのウルサイ。俺は別れたくねえつつーのに、それが、そんな誤解から来てるってか？　　ったく、

「冗談じゃねえ」

ガシガシ髪をかき回す。

「だって、頷いたじゃない！」

「そりゃそうだろ。お前がそうしたいなら、そうしてやりてえとか思うんじゃねえか。テメーが別れるっつーなら別れる。テメーが付き合いてえっつーなら、付き合う」

第一、誰が好きなの女の枷になるような行為をしたがるんだ。別れてえ男から付きまとわれんのって、明らかに迷惑だろ。んな真似はできねえって。

「ええっと。あたしのこと、好き？」

おい、んな不思議そうな顔してんじゃねえよ。
がくり、と。項垂れる。

「悪かったな。だから、本気じゃねえなら、二度と別れるとか言うんじゃねえぞ。俺はお前がそう言うなら別れるんだからな。とにかく、一生一緒にいてえと思うぐらいには好きだ。分かれ、お前」

付き合ってるっつー時点で解ってくれ、気付け、マジで！

「うん うんー！」

幸せそうな笑顔。

そっぴや、最近、楽しそうに笑ってても幸せそうには笑わなかったな、コイツ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7472e/>

別れた日。

2010年10月13日03時23分発行